

1970年代における諷刺小説の思想的発展

アルタンゲレル・ムンフオルギル

(Алтангэрэл МӨНХ-ОРГИЛ / Altangerel MUNKH-ORGIL)

(モンゴル国立大学ウランバートル校東洋学研究科科長、准教授、文献学博士)

1960年代以降、モンゴルの新時代の文学はその構造の全般において刷新され、この刷新はさらに技法の獲得となり深まりをみせた。研究の水準においても創作論においてもこの傾向は見られる。“1960年代以降の時代は新しいスタイルのリアリズム文学の発展において非常に重要な段階であり、モンゴル文学があらゆる指標、特に技巧面において全体的に発展し、専門的かつ完全な書写文学へと進化した時期と言える。作家たちはひとつのイデオロギーの枠組み内で創作・執筆活動を行っていたとはいえ、作品の思想内容は大いに深まり、形式の多様化や技巧面の明らかな向上がみられた”¹。主要な文芸ジャンルは新たな時代のモンゴル文学を構成する要素としてすでに確立し、さらにジャンルが細分化され、それぞれを代表する作家たちが登場し、相応の経験を積み始めた。

文学発展のこの段階における顕著な表徴の一つは、諷刺小説の発展傾向と思想面の深化である。諷刺小説が文学発展政策に反映され、諷刺小説のみで編纂された選集・作品集の出版、「笑話集」シリーズ、「諷刺小説精華集」等が出版され、また国際的な諷刺小説コンテストにモンゴル作家が参加し一定の成果を収めるようになったこともこれを証明する。Ts. ドルジゴトブ、J. バラムサイ、Shag. ツェンドアヨーシといった諷刺小説の代表的作家が現われ、職業作家として専門特化し、ジャンルとして確固としたものとなり始めた。同分野におけるこうした創作論及び思想的発展は、二十世紀のモンゴル文学にみられた現象として特筆すべきものである。

文学発展における法則性や創作論上の進展に加え、作家個人の高度な芸術的感性やスキル、実生活で遭遇したであろう具体的な出来事といったものが相互に作用し影響しあうことで、彼らに一定の自信を与えた。1970年代中頃、軽い諷刺や笑話などから書き始めた作家たちは、後により幅広い問題に向き合い、社会体制や個人の精神世界の多面性を見出し表現するようになった。その際、喜劇的でありながら深く読み解くと悲劇的な域に達するといった芸術的経験を生み出し、それが創作技法の発展を示す明確なひとつの段階となったと言える。

¹ Ts.ムンフ「序文」『モンゴル現代文学史第三巻』,UB, 1997, p.4.